



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

5

# 質的研究における ビジュアルデータの 使用

マーカス・バンクス

石黒広昭 [ 監訳 ]

世界はビジュアルデータにあふれている。  
しかしいまだに人文社会科学では、  
言語データを中心に研究が進められている。  
絵画、写真、映画、ビデオ、描画、図・・・その  
多声的で豊かな情報をどのように捉えたらよいのか？

ビジュアルデータの特徴を理解し、それを有効活用するためのノウハウ  
だけでなく、利用上の注意点も指摘。初めて現場調査に行く人はもちろん、  
既にフィールドワークを経験している人にも役立つ入門書。

新曜社



**SAGE 質的研究キット**

ウヴェ・フリック監修

5

# 質的研究における ビジュアルデータの 使用

マーカス・バンクス  
石黒広昭 [監訳]

新曜社





## 編者から

ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

### 「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は、全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地から研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネス研究、経営研究、認知科学等の質的研究の**実践者**たち。
- こうした分野で質的手法を使用する**大学教員**。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の**学部生と大学院生**。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の方法的視点と著者が述べるアプローチから取り組まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

## 質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の一つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって——経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り組まれるかもしれない。
- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって——これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

## 質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通するいくつかの特徴を挙げることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。

- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプローチが開発される。
- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

## 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（ウヴェ・フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図して

いる。この本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実際的な諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。


- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール）は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』（マイケル・アングロシーノ）は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題（サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題）が、より一般的な諸問題（倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性）の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』（ロザリン・バーバー）では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。
- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（マーカス・バンクス）は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている（インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて）。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実際的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的データの分析』（グラハム・R・ギブズ）では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実際的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用に、注意が払われ



ている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』（ティム・ラプリー）では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実際的な問題が考察される。

- 『質的研究の「質」管理』（ウヴェ・フリック）は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマの文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについて現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるといふ文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいたSAGE社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げてくれた。



## 本書について

### ウヴェ・フリック

ビジュアルデータは、視覚人類学などの領域で時に使われていたが、その後、質的調査の中で一般的に使われることが多くなってきている。「SAGE 質的研究キット」の他の巻は、その議論のほとんどが発話された言葉や、実践の観察に集中しているため、ビジュアルデータに焦点を当てた本書は、この「キット」に新しい視点<sup>[訳注]</sup>\*を与えるものとなる。それぞれ異なるかたちのフィールド調査を扱ってはいるが、本書はエスノグラフィー\*<sup>[訳注]</sup>について書かれたアングロシーノ (Angrosino, 2007) と密接に関わっており、ディスコース分析について書かれたラプリー (Rapley, 2007) とも同様に関連がある。ラプリーの本と本書が扱うのは、分析素材として実際に存在しており、主に選択されて文書記録化されるものであり、多くは研究目的のために作られた素材ではない。こうした素材は、主として分析の過程でデータ\*になる。それゆえ、両者とも、データの産出と分析に対して、素材が持つ特定の質を考慮に入れた統合的なアプローチを備えている。しかしながら、この本もデータ分析のためにコンピュータを使うことに関心があり、質的データを分析する上でギブズ (Gibbs, 2007) が示唆していることが、この文脈においても役立つだろう。ビジュアルデータは、よく言語的データを用いる手法と組み合わせられて使われるため (たとえば、写真誘発法)、インタビューについてのクヴァール (Kvale, 2007) や、フォーカスグループについてのバーバー (Barbour, 2007) も、本書を補足するものとなるだろう。

この本の焦点は、質的調査においてビジュアルデータを使用することに対し

---

[訳注] 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

て、歴史的、理論的、実践的にアプローチすることにある。本書にはそのアプローチを例示する多くの事例研究が含まれている。本書は、また、ビジュアルデータを用いる研究における特別な倫理的問題や、ビジュアルデータを用いた手法で得られた結果をどのように学術研究を行う人たちやその他の視聴者、そして研究に参加してくれた人たち自身にプレゼンテーションしたらよいかという問題についても取り上げている。

本書の中心にあるのは、どのようにしてビジュアルデータを用いた研究を進めていくのかを明らかにすることである。それはこの種のデータを収集し、分析するために、研究者がその意図をはっきりとさせるところから始まる。この点で、研究に参加する人々との協働研究に言及しているところは、他の質的調査手法にとっても非常に興味深い。ビジュアルアプローチの利用を、フィールドで生活するメンバーの視点をとる方法としてだけでなく、研究協力者（たとえば、子どもたち）の眼を通して世界を見る方法として論じているところも、同じく関心を引くだろう。最終的に、この本の中では、調査のために材料（この場合は、ビジュアルな素材）を作ることと、すでにある素材をデータとして使うことの間にある緊張関係について取り上げており、その検討の仕方は、他の種類のデータや素材を扱う研究にとっても、大いに実りあるものとなりうる。また、こうした特別なタイプの調査を計画すること、そしてこうした研究の質を特別なやり方で評価することについても考察を加えており、それらについては「SAGE 質的研究キット」の1巻と8巻（Flick, 2007a, 2007b）が補っているが、それと同時に、本書は新たな特別な示唆を与えることで、それらを補足するものとなっている。

# 目次

<b>編者から</b> （ウヴェ・フリック）	—————	<i>i</i>
「SAGE 質的研究キット」の紹介		i
質的研究とは何か		ii
質的研究をどのように行うか		iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲		iv
<b>本書について</b> （ウヴェ・フリック）	—————	<i>vii</i>
<b>1 章</b> はじめに	—————	<i>1</i>
なぜ画像なのか（画像ではないのか）		4
ビジュアルであること		5
ビジュアルデータを用いた調査研究の計画と実行		9
重要な用語と概念		13
この本の構成		20
この本に掲載されたイメージについて		22
<b>2 章</b> 社会調査におけるビジュアルデータの位置——概略史	—————	25
はじめに		27
社会調査における写真の初期の利用		29
社会調査における映画の初期の利用		34
社会調査における写真と映画のその後の利用		37
その他のイメージの利用		39
<b>3 章</b> ビジュアルなものを研究するさまざまなアプローチ	—————	45
はじめに——理論と分析		47
ものごとの見方と見られるもの		48
カルチュラル・スタディーズからのアプローチとそのほかの視点		50
形式主義の方法		57
リフレクシヴィティと他の経験的アプローチ		66
イメージの物質性		68

対象、分析、手法	72
<b>4章 ビジュアルデータを用いた手法とフィールド調査</b> —————	<b>75</b>
フィールドにおけるビジュアルデータを用いた手法	77
写真誘発法やその他の既存のイメージを用いた手法	79
写真誘発法	86
映画誘発法	92
画像を作ること	95
協働的な研究	103
倫理	113
許可と著作権	117
<b>5章 ビジュアルデータを用いた調査のプレゼンテーション</b> —————	<b>123</b>
プレゼンテーションのいろいろな方法	125
視聴者を理解する	126
学術的な文脈でのビジュアルデータを用いた調査の プレゼンテーション	127
研究協力者に向けたビジュアルデータを用いた調査の プレゼンテーション	135
デジタルメディアとマルチメディアでのプレゼンテーション	140
イメージや他のデータの組織化	147
<b>6章 結論——イメージと社会調査</b> —————	<b>153</b>
われわれは何を学んだのか	155
ビジュアルデータを用いる手法の有用性について	161
訳者あとがき	165
注	171
用語解説	179
文献	183
人名索引	195
事項索引	197

装幀 = 新曜社デザイン室

## 事例研究、ボックス、図のリスト

### 事例研究

ビジュアルデータを用いた手法と仮説検証	1
子どもの眼を通して見る	5
A. C. ハッドンと過去の表現	25
植民地下のインドにおける社会的差異を見る	30
ベンサムのパノプティコンに関するフーコーの考察	45
写真の声——アクションリサーチの可能性	103
カヤポ族のビデオ	111
オークパークストーリーとミクストメディアによるプレゼンテーション	123

### ボックス

2.1 実証主義と解釈主義のアプローチ	28
4.1 フィールドワークとエスノグラフィー	75
6.1 探索的方略としてのビジュアルデータを用いる手法	153

### 図

1.1 『ナバホ・ウィーバーII』を撮影中のアルタ・カーン	2
2.1 「トレス海峡諸島」A. C. Haddon	26
2.2 「インド人女性の種類、カシミールの少女たち」の郵便葉書	31
2.3 ベニー・ムービーに見入る少年たち	34
3.1 ベンサムのパノプティコン（一望監視施設）	46
4.1 ポール・ヘンリーとジョージス・ドリオンの撮影	76
5.1 オークパーク住宅センターで撮影するジェイ・ラビー	124
6.1 「ルビンの壺」	154





# 1章 はじめに

なぜ画像なのか（画像ではないのか）

ビジュアルであること

ビジュアルデータを用いた調査研究の計画と実行

重要な用語と概念

この本の構成

この本に掲載されたイメージについて



## この章の目標

- さまざまな研究法のひとつとして、社会調査においてイメージが使用され、研究されるべき理由を理解する。
- イメージを作り出すことと、イメージを研究することの違いを知る。
- 調査過程でビジュアルデータが用いられる研究法の位置づけを理解する。
- 重要な用語や概念を知る。
- この本全体の構成を知る。

## 事例研究 ビジュアルデータを用いた手法と仮説検証

ソル・ウォースとジョン・アデアが1960年代に行った「ナバホの目を通して」の研究は、視覚人類学者にとってばかりでなく、他の多くのビジュアルデータの研究者たちにとっても、そうしたデータを用いる調査として画期的なもののひとつだった。この研究には批判があるものの、その成果は、明確な目的と方法論にもとづいていて、巧妙にデザインされた実証研究の好例



として際立っている。コミュニケーション学者であり、人類学者でもあるウォースと人類学者で言語学者でもあるアデアは、映画などの動画を見た経験がほとんどない人々がどのように映画作りをするか、そして、彼らの世界観が概してどのようにフィルムに反映されるかを知るための研究に乗り出した。具体的には、ナバホ族が自分たちの世界観を伝える際に、言語的説明を「しなくてもよい」ようにしたのである。調査の前提には、いわゆるウォーフ・サビア仮説として知られている理論があった。使用している言語の構造が周囲の世界の見方や理解の仕方を規定するという見解である。非常に異なる言語を話している者同士や関係があまりない言語の話し手同士の場合、たとえば英語とナバホ語の場合には、ウォーフの言葉を借りれば、たいへん異なる仕方ですべて「自然を切り出し、それをある概念に入れ、意味づける」作業を行っている (Whorf, 1956, p.214)。いろいろなやり方でこの仮説の検証が試みられてきたが、これまでのところ、そうした試みそのものが、言語それ自体に大きく依存するかたちで調査・評価されてきたために堂々巡りになっていた。ウォースとアデアの画期的な点は、別のコミュニケーションチャンネルを見つけ、使用した点にあった。



図 1.1 アリゾナ州パインズプリングスで『ナバホ・ウィーバーⅡ』を撮影中のアルタ・カーン (写真：リチャード・シャルフェン)

ウォース、アデア、そしてウォースの学生であるディック・シャルフェンは、アリゾナ州の比較的伝統的なコミュニティに住んでいる7人のナバホ族

の人々に、16ミリフィルム用カメラを渡した。そのコミュニティの多くの年配者はナバホ語しか話さなかったが、映画制作者は全員バイリンガルだった。このナバホの7人は、映画というものを少し見たことはあったが、よく観る経験があったのは1人だけ（芸術家）だった。しかしながら、ウォースとアデアが「本物のナバホ（professional Navajo）」（Worth & Adair, 1972, pp.72-73）と呼ぶ、ナバホの伝統と習慣を自覚的に意識し、他者にそれらを表現することに慣れている人は、この7人の中にはいなかった。録画と編集の基本的な操作を習得した後、撮影するのは何でもよいことになっていた。できあがった映画は、銀細工と編み物、それにナバホ流の治療儀式に関する短編のサイレント・ドキュメンタリーであった。

結果は、サピア・ウォーフ仮説の「弱い」バージョンを大筋で裏付けるものだった。すなわち、「言語は社会的現実を導く」（サピア）が、それを決定するのではないという仮説である。ウォースとアデアはナバホ族の映像制作者たちが一連のカットをどのように編集したかを評価して、（ナバホの）映画制作者たちは、西洋流の映画作りの伝統に共通する、カット間が論理的にスムーズにつながるように編集する連続カットの原理に気づきもせず、適用することもなかった（つまり、カットが飛んでいても問題がないと考えた）。その一方で、（編み物をしている人が羊毛を梳いて毳状にするまでの行程を全部そのまま見せるといった）明らかに冗長で、焦点がはっきりしない行為は、ナバホの言葉に見られる、言語学的に特徴的な「行為」についてのナバホ的な考え方と関連しているのではないかと指摘している。「ナバホの目」を探そうとする研究は、決定的な結論をもたらすことはできなかった。（たとえば、収録された映画の中には、ナバホ族の視聴者が「読み解く」ことができないものもあった。象徴的なのは、あるインフォーマントが、「理解できない映画があったけど、それは英語だったからだ」と言ったことである。実際には、映画はすべてサイレント映画だった。）しかし、これは少なくとも、特定の研究上の問いを設定して、視覚的手法を使用して行われた、パイオニア的な初期の研究であった。この研究について書かれた1972年のオリジナルのモノグラフは、25年後にディック・シャルフェンによって改訂され、その後なされた多くの議論と共にまとめられている（Worth & Adair, 1997）。

## なぜ画像なのか（画像ではないのか）

なぜ社会調査を行う研究者はイメージ——絵画、写真、映画、ビデオテープ、描画、図、その他のイメージ——の分析を自分の研究に取り入れなくてはならないのだろうか。そこには2つのはっきりとした理由がある。最初の理由は2つ目のものよりわかりやすいが、ひとつ注意しなければならない点がある。

最初のもっともな理由は、イメージは社会のあらゆる場所で見られるという事実である。このため、あらゆる社会調査において、視覚表現\*を議論することが潜在的\*に可能である。どんなに厳密に焦点を狭く絞った研究であったとしても、すべての社会調査はあるレベルでは何かしら社会一般について言及しており、イメージがどこにでも溢れていることを考えれば、その分析には何かしらイメージについての検討も含まれるべきだ。もちろん、音楽や衣服その他、人間の社会的経験に関連する多くの側面についても、同様のことが言える。しかし、それらの現象については多くの重要な研究があるにもかかわらず、おそらく（言語形態をとった）音を除いては、社会調査においてイメージの持つ感覚に強く訴える力を仮定して取り組んだ研究はないようだ。次章では、なぜこのようなことになっているのか少し議論する。

社会調査を行う研究者がイメージ分析を取り入れたいと考えるであろうもっともと思われる2つ目の理由は、イメージの研究、またはデータ収集や作成にイメージを取り入れる研究が、他の方法では捉えることのできない社会学的洞察をもたらす可能性があるからである。テレビ視聴が子どもに及ぼす影響についての研究のように、視覚媒体に焦点を合わせた研究であれば、それは自明だが、その他の研究の場合にはそうとはいえず、その必要性を証明するのもずっと難しい。ビジュアルな研究の成果のいくつかを高らかにうたいあげるのは簡単である（後の章でいくつか例を紹介する）。しかし、イメージを使わない他の調査研究手法では、それを使った場合と同じ洞察を引き出すことができなかつただろうことを証明するのは、それほど簡単なことではない。それには同じ研究テーマで、同じ研究協力者に対して、調査手法以外はまったく同じ一連の研究を行わなければならない、その際、それぞれの研究を行う調査研究者は他のチームの結果について知らないことが求められる。実験室で行う心理学実

験であればこういったことも可能かもしれないが、フィールドで研究を行おうとすると、途端に多くの変数が統制できなくなるだろう。この本の結論の章でもう一度この問題に触れるが、それまでは自制して、ビジュアルデータを用いる調査とその結果が示す示差的な特徴を記述するだけにし、その独自性については主張しないでおく。

ある研究法を別の研究法と比較検証するための実験条件を準備する難しさを見ると、次のように警告しておくべきだろう。本書のような、1つの社会調査法に特化した本やマニュアルが存在するとしても、実際には、社会調査を行う研究者は、きちんと形式的に整ったもの（あるタイプのイメージ内容分析、内的整合性チェックを伴うクローズドなインタビュー手続き等）から、かなり非定型なもの（人々とおしゃべり、日常行動の観察）まで、多くの異なる研究法を採用し、調査を進めていく。単独の方法や調査範囲に限定することは、恣意的にある研究法やエリアを無視するのと同じく、社会学的にも制限を与えることになる。本書は、ビジュアルデータを用いる調査研究法は特色を持った、価値ある方法であり、どのような研究であれ、社会調査を行う研究者が考慮すべきものであると主張するものであって、ビジュアルデータを用いる研究法が他のすべての研究法にとって代わるべきだと主張してはいない。ビジュアルデータを用いる調査は、社会調査を行う研究者が採用する、多くの研究手法のひとつのテクニックにすぎず、文脈によってより適していることもあれば、そうでない場合もある。

## ビジュアルであること

### 事例研究 子どもの眼を通して見る

多くの社会学者や人類学者が、研究協力者が見ている世界を「見る」ために、カメラ（写真機や撮影機）を研究対象者に渡す実験を行ってきた。この手法には、通常結果的に得られた映像の解釈がからむという問題点はあるものの、研究協力者が、インタビュー形式で自分を言葉で表現するのが難しい場合、たとえば、学習上の困難を抱えている人やすぐに飽きてしまう子どもたちの場合には特に有効である。